

仏の心を心として

我等の目標

- その一……………
- その二……………
- その三……………
- その四……………
- その五……………

我等の目標 その一

「私どもは、仏の心を心として一生涯、尊いみ法を求めつづけて、はつきりと人生の意義をつかんで生きましよう。」

仏の心を心として

私どもが、何事をするのにでも、問題になるのは、

どんな心で

何をしたか

この二つであります。

形の上では、どんなにいいことに見えても、その心が悪かったらいいことと言えませんが。

自分の勝手ばかりや、極端な欲や、人を陥れてやるためや、つまらない感情や、そんなことでしたことに、決して美しい実を結ばうはずがありません。

私どもは、何時も何時も失敗ばかりくり返しています。

私は何時も思っています。世界中の新聞がよってたかって私を攻撃したとします。それも怖い、それよりも、もつと恐ろしいことは、私の心の中に悪いものがあることです。

誰にも彼にも褒められた所が、私の心の中に悪いものがある間、私はちつとも嬉しくはない。

「私の心を、きれいな水晶のようにしたい。」

それは、本気で考える人なら、誰でもが願うことであります。

世には、ちつともこの願いのなくなつた人があります。

それは、とても尊いお方か、

或いは、魂の腐つた人かであります。

支那の孔子様は、毎日、我が身を反省する道ふりかえを説かれました。

吉田松蔭先生も、お弟子に、内省を教えておられたそうであります。

ギリシヤの聖者、ソクラテスが「汝、自身を知れ！」と言って、人々を誡めたことは、誰でも知っていることです。

「そんなことは古い古い。現代の青年には、古いぞ。」
果たしてそうでしょうか。

早い話が、家庭の中に一人でも、この心がけのない者がいると、決して円くは治まりません。

なぜなら、こうした心がけのない人は、必ず、自分勝手にやっても平気ですから。

どうにかして、私の心に、悪い思いがおこらないように、私のすることが悪でないように。

そう心掛けますと、今まで知れなかつたものが、沢山私の上に見出されて来ます。底がないほど、数えきれぬほど私の心の中に悪いものがあることが知れて来ます。ここで、誰でも、はたと行きづまります。

蓮如様は、「自分のところに、これは自分の悪い所だぞと、気のつくほどの悪は他人から見れば、大変に悪いことだから気をつけろ。」と教えられました。

人の悪口なら平気で言えるが、自分の悪口を、自分に言いつて聞かせる人が、少なくなつたのが、今の世でありますまいか。

そこで、自分で自分の悪いのに困つた人、それが親鸞聖人でありました。
どうにか出来ないか。

そこに開いた道が、み仏を念ずる道でありました。

ところが、み仏を念ずるといふのは、み仏はじつとして何もしないでいられて、私どもだけが念ずるのであるか、というところ、そうではなかつたのです。

仏こそ、私を念じつづけて下さる。

その仏のみ心と、私が仏を念ずる心と、ちがつたものではない。

つまり、仏のみ心によつて、仏を念ずるのだと、わかつて来ました。

このみ仏の心が、私の心となつて下さることを「信」といふのであります。

それなら、その時には、心は水晶のようになるのか、と云いますと、そうではないのです。

水晶とは、仏の心であります。

私の心を水晶にしようたつて、それは、泥をこねて蓮の華にするよりもむつかしい。そこで、泥の中に蓮が咲くように、悪い心の中に、仏の水晶の心を頂くのです。

そのみ仏の心が、ものを言うのであります。

み仏は尊い。

み仏は清い。

み仏は温かい。

み仏は鋭い。

そのみ仏の心を心として、生きてゆくのが、私どもの生きる道であります。
み法を求めて

「一生涯、尊いみ法を求めつづけて……………」
仏の心を心として、私どもは、まず、どう生きたらいいのでしょうか。
それについて当然、第一に出て来ることは「み法を聞く」ということです。
もちろん、み法を聞いて、仏のみどころが、わかるのではあります。しかし、一度
わかつたら、それでいいかといいますと、それではいけません。
体には、毎日三度の食事を与えます。
然れば、心にも食物を与えねばなりません。み法は心の食物です。
もし、人間でも、小さい時から猿と一緒にして大きくすると、遂に、猿のすること
より外、知らないそうです。
そこで、人の人たる所以は、どれだけ、高い教えを受けたか、どれだけ、深いみ法
を聞いたかということにあると言つても差し支えありません。
ですから、真剣に生きる人は必ず、一生涯かかつて、求めます、聞きます。
私どもは、もう大方四十歳になりますが、内に省みれば、何もわかつていません。
ほんとに、たった昨日出発したばかりであります。何でじつとしていられましょう。
しかも、すこしでも聞けば聞くだけ、無限の深さが待っています。

人生の意義

「はつきりと人生の意義をつかんで生きましょう。」
毎日、山へ川へと働いている人を、今更大学者にすることも出来ません。
五六十のお婆さんを、今更博士にも出来ません。
世界中のそれぞれの人を皆、大金持ちに、高等官にすることも出来ません。
しかし、それぞれの人に、み仏の心を伝え、それぞれの世界において、自分を真に
生かすきつて、よろこび生きる道を与えることなら出来ます。
人間に生まれたことを喜び、たとえ、どんな苦しみがおしよせても、その中に、そ
れをはね返して生ききつてゆく力を得ることが一番大切であります。
浜の砂粒一つも、あるべき理由があつてあり、草一本も、天地の相に育つて、天地
の相に、花を咲かせています。
私どもも、正しい生き方を知らせて頂き、天地の道理、即ち、み法の相に生きさせ
て頂きたいものであります。
「私どもは、仏の心を心として、一生涯、尊いみ法を求めつづけてはつきりと人生の
意義をつかんで生きましょう。」

我等の目標 その二

「私どもは、仏の心を心として、強く生きぬき、み法を私の生活の上に打ち出してゆくことに精進しましょう。」

我等の生活の第一目標は、一生涯を真理の使徒として、道を求め法を聞いて生きぬく求道不退の生活たらしめたいということでありました。み法、即ち真理を求めるということなしには、向上も進歩、発展も創造もないからであります。そこでこの第一の目標から何が生まれるか。それが、次の第二の目標であります。即ち

「私どもは、仏の心を心として、強く生きぬき、み法を私の生活の上に打ち出してゆくことに精進しましょう。」と念願しないではられません。

生活

唯単に話を聞いて感心する、それだけでは浪花節道楽が一生寄席に通つたのと大差はありません。

我等は念仏の信者に了らないで、念仏の行者——即ち生活者にならねばなりません。食事をして、子供を生んで……それだけで終わるならば、それは、動物と大差のない単なる生存であつて、生活とは言えません。

生存から生活へ。

宗教は実に我等を単なる生存から生活へと立ちあがらせてくれるのです。

したがつて宗教は、説教者の口の中に生きるのでもなく、本の中に輝くのでもない、実に我等の生活の中に生きて光るべきものであります。

ですから如来は、その全威神力を人生にむかつて働きかけて来ます。その本願力が衆生の大生命となり、衆生の迷いを打ち破りつつ、如来が如来自身を人生に活躍すればこそ、如来を生活の本尊とよぶのであります。

ですから、我等は、人生生活をぬきにして、宗教も仏もないことを絶叫するのであります。

即ち「仏の心を心として、生きぬく」ことが宗教生活であります。

強く生きよ

我々は絶対に、強者でなくてはならない。弱者ほど惨めなものはありません。強者は勝ち、弱者は負ける。道を生きて、生活を成就するにも絶対に強者でなくてはなりません。

しかし、強いにも亦、幾通りもあります。私の強いのも、体力の強いのも、喧嘩に強いのも、善に強いのも、悪に強いのも、ですから単に強い強いではわかりません。

そこで「仏の心を心として、強く生きぬき」と言つたわけであります。

親鸞聖人を弱い方のように考えた時代があり、又そう思っている人があります。しかし果たしてそうでしょうか。なるほど、人を裁くことや、喧嘩することには弱かったかも知れない。けれども、大法のため、道のためには、命すら捧げてゆくほどの強者でありました。

如何に、迫害があらうと、非難攻撃がおしよせようと、如何なる苦難が横たわつていようと、それを踏み越えて、大法を生ききられました。一生貧しい、苦悩に満ちた生活をしてゆかれたのも、それは決して世の迷妄と妥協したり、信念をまげたりせられなかつたからであります。

「強く生きぬく」ということがなくなつて、一本道を生きぬくことを棄てた時、その人は、もはや氏名を忘れ、道を捨て、自分自身すら葬つた時であります。

虐げられた一本の松があります。根は、岩又岩の間をぬうております。けれども彼は決して不平も言わず、成長をやめもしませぬ。まがりまがつて太つてゆきます。それ故に彼は美しい巖上の松になりました。

もし生命があるならば、どんなにしてもその太ることを碍げること出来ません。

わらびは弱いか……然り弱い。

わらびは強いか……然り強い。

強いとは、そもそも何をいう。

弱い女性は弱くていい。だが弱いわらびを誰が弱いという。

強く生きぬけ！ 仏の心を心として、

風が吹いてもおそれるな。枝を折られても悲しむな。右にゆかれなんたら左にゆけ、上にゆけなんたら下にのびよ。まがりくねつて延びてゆけ、それが真直い一本道だ。

強い仏が汝に生きる。

道を生きる

前においては、仏の心を仏として、強く生きぬけと言いました。すると、陰の外で、

「強く生きてゆけないのが、我等凡夫だ。」

「弱いままでお助けが他力だ。」

そんな色々な言葉が聞こえて来るようです。だが私どもは全て今、言いわけや議論をしません。仏の道は、凡夫の勝手や、墮落した生活の言いわけのためにはないのです。

今まで道を生きてゆかないで、道草ばかり食つていた人間をたたき出して、無上正真道を生きぬくほんとうの信念と力が恵まれるのが、仏教の救いなのです。

何の力もない泣きべそ

歩む足のない幽霊生活

理想のないその日すぎ

不健全な本能的な享樂生活

何と言つて見ても、それでは決して救われていません。そうした我等を、明るい道の上に更生せしめるものは、無限絶対の大生命たる如来の本願力おちからをおいて、外にはあり得ませぬ。

心の滋養

我等の目標の第一が求道ということでありました。道を求め法を聞くのは、それが私の上に実現されてゆくことを信ずるからであります。

み法を求めるとは、心の食物たべものを摂ることでもあります。体に食物を摂れば、それが体の養いになります。健康である以上、必ずそれが体そのものになります。

心の滋養だつてそうであります。聞いたり、読んだりしたことが心を養わないならば、聞くことも求めることも無意味であります。

お隣の小母さんの悪口を聞いてさえ、二三日も腹を立てていたり、時には一生なかわる仲悪になるではありませんか。

ですから聞かねばならない。求めなければいけない。

しかもそれが、心の養いになつて、心を太らす。

心が太つて来ると、それが生活の上に出て来るのは当然です。

精神生活が進み、悩の重さが増し、やがてその生活が生きて来た時、それが、社会に輝かないではありません。

頼山陽先生は、

「我を天才だというものは、真に我を知つた者でない。よく勉強刻苦した人だという者は、真に我を知れるものだ。」と云いました。

学んで聞いて、求めて得た自分の実力は、誰とでもこれを如何ともすることは出来ません。しかして世間は結局実力より外はものを言いません。しかるに世間は、実力を培うことよりも上手になろうとします。間違ひも甚だしいことである。

生活の上に

その一

真に聞いたみ法は、必ずそれが靈に生き、肉に生き、生活に生きるはずで。しかるに、随分長い間お寺参りをしていながら、何もない人があります。一体それはどうしたのでしょうか。

その第一の理由を考えます。

「彼女の聞法二十年

しかし彼女に何物もない。

唯聞くだけが賢いのなら

浪花節道楽が一生寄席に通うて何程賢くなつたか。

一体彼女の何処に欠陥があつたのか。

彼女は我を忘れて話しを聞いたのだ。

我を忘れて話を聞けば、話は話におわる。

話を聞く者は多く、道を求むる者は少ない。

話を聞いて一生を送るか、

道を求めて三十年を費やすか。

往生極楽の話は甘く、往生極楽の道は安くして辛し。」

以上は、昔の『光明』に出た巻頭の叫びです。我自身を忘れて、頭だけで聞いたり、一種の趣味になったりしますと、唯、理論がわかつただけになったり、或は単に感情だけの満足になったりして、生活全体の問題になりません。

その二

生活の上に出て来ないで、蓮如上人のいわゆる「日頃の悪心を廻して善心になりかえる人」になることが出来ないのは、しよせん、聞き方が本気でないのです。ここで悪心とは、仏とも法とも思わぬでたらめな生活のことであり、善心になりかえるとは、仏の心に生きる信心の行者となることです。

信者はあつても行者がない。蓮如上人は一度も、信者と云われなないで、行者と云われました。業行者とは生活者のことです。

体が合掌せず、口が称名せず、心が念仏せず、求道せず、生活しない人とは、いづれお別れする日があります。

本格的な求道をなすべきであります。本気で聞くべきであります。

その三

第三の理由は、初めから、悪い癖、即ち弊害におち入っている人です。

譬えて言うると、老人たちの中には、

「我が機は変わらないのが自性だ。」と初めから坐りこんで、自分で自分の足をくくっている人があります。善悪いづれをも超えて、大法によつて打ちくだいて頂くことを忘れて、初めから角力をとらないで、寝てまっっているようなものです。

悪逆弁円は、聖人を殺そうとしてが、後に有難い明法房になつて昔の板敷山のほとりに立つて、

「山も山、道も昔に変わらねど、変りはてたる我が心かな」と詠じました。

変るべきものを変えつくし、崩れるものを崩しつくし、知るべきことを知りつくした、その徹底境において、永遠変らぬものにふれるのです。

それなのに、「変らぬのが、凡夫の自性だ」と坐りこんでいたのでは、聞いても求め、何の役にもたちませぬ。

仏の心を心として

宗教は、決して話でも、単なる議論でもありません。仏は我にはたらきかけ、人生によびかけて、今日の我等を救いきります。み法は、信を通して人生の上に輝きます。そこに仏の心を心として生きる天地が開けます。

仏の心を心として合掌念仏を中心に生きる者こそ、強く生きる人であります。み法をいよいよ聞き開き、私の生活の上にみ法を生活し、無上正真の大道に精進して一生不退転に歩ませて頂きましょう。

「私どもは、仏の心を心として強く生きぬぎ、み法を私の生活の上に打ち出してゆくことに精進致しましょう。」と念じないではいられませぬ。

そこにみ法の如く生きていない自分を懺悔する世界も、み法の如く生かされて歓び得る世界も開いて来ます。

人生の真実の喜びは唯、み法の中に全身全霊を打ち込んだ所のみ生まれます。

我等の目標 その三

「私どもは、仏の心を心として、真実愛を尚び、明るく嬉しく生きることを生活の目標に致しましょう。」

真実愛

我等の目標は

第一、一生涯求道する。

第二、その聞いたみ法を生活の上に打ち出してゆく。

と述べて来ました。そこで次にここにかかげた第三の目標即ち、自分の生活を成就してゆくと共に、我等の生活を成就してゆくことに及ぶのは当然であります。しかしてそれに答うるものは「真実愛」であります。

「人生を美しくするのは、真実愛である。

私が一番求めているのも、真実愛である。

私が一番に私に求めるのも『汝よ真実愛の人になれ』である。

真実愛は人生の光である。

人は唯、真実愛によつてのみ結ばれて一つになり得る。

過去の聖者は一人残らず、愛の人であったのだ。」

私は今、ペンを持ったままで、こんなことを次から次と考えていました。真実愛の問題はあまりに、人類に課せられた大きな問題であります。

真実愛の諸相

愛は、熱い血の流れであり、真実そのものであつて、算盤そろばんではじかれない、割り切れない、生命のたぎりであります。ですから、外からつけられるものではない、内から湧くものであります。人格の根底に動いているものであります。だから、自覚者は

必ず愛の人であります。真実愛の問題について、一つの逸話もないような聖賢は一人だつてありません。

残忍は、得手勝手な、我慢な、邪見な人間は、それが、学問すればするだけ、富を持たせば持たすだけ、地位を得れば得るだけ、家庭や社会の癌になり、人を苦しめ悩まず、嫌な悪魔的存在となります。ですから愛の問題は人生の根本問題であります。

寒い寒い冬の日の夕暮れ、冷たい冷たい雪や水の中、ひしひしと寒さが身にしみて来ます。一ぱいの温いお湯をくれる者もない。雪はますます降りつみます。しかも旅は遠い。何かことを成就したほどの人は必ず、こうした悲痛な境遇に立った経験を保持しています。

単なる感傷ではない。動きのとれそうもないほどの悲痛な境遇です。弱い人は自殺します。自殺しない迄も、重い荷物を下して使命を捨ててしまおうとします。

こうしたせつぱつまった時、多くの人は逃げてゆきます。堂々たる行列にはついて行つても、行き倒れを見た時は、かわり合いになることを恐れたり、金がかかることを嫌つたりして逃げてゆきます。しかしその時、飛び出して来てこの人を助ける人もあります。一ぱいのお湯をもち、一碗の食物を供養し、光を捧げて、道を示してくれる仏の使いのような人が現れます。必ず現れます。

貧しい者が、真に人生の有り難さを感じるのはそうした経験を持つからです。私どもは人の真実愛によつてのみ、人生の歓びを知るのです。

しかし、かつて私どもが行詰つて道の真中に立つて、ともすれば弱くなつたり、たゞめらつたり、唯ぼんやりと泣いていたりした時、私にお湯をくれたり、優しい言葉をくれたりするかわりに、厳しい鞭をあてたり、鋭い言葉で叱り飛ばしたり、ことさらに冷たい態度をとつたりされたことがあります。それをその時は情なく思つて恨んだり、誤解したりしたが、あとになって、しみじみとその慈愛を感謝せずにはいられなくなる時があります。

ここまで考えて来ますと、愛されるといふことと、愛を認識するといふことの別をはつきり考えずにはいられません。私どもの内面に眼が開いていないならば、真実に通う窓が開いていないならば、如何に慈愛につつまれていても、それを受け入れることは出来ません。

愛することも難しいが、愛せられることはもつと難しい。

真実慈愛を認識する心こそ、ほんとうの愛ではありますまいか。

枯木には、肥料をやつても太りません。冬が来ても年輪を造りません。

邪見や我慢では、真実は受け入れられません。ここにおいて我等は愛を外に求めるより先に、我自身の世界を培い、掘り下げてゆくことに返らねばなりません。

「仏の心を心とする」大信心の天地に生まれ出でなければならぬ理由がここにあります。

仏教、特に如来本願に生かされる真宗において、大信心を一切の根底とするのはこのためであります。大信心とは、人間の内面の全き充足であり、燃焼であります。この金剛不壊の大信心のみが一切の上に、新しき真実愛を知るのであります。

信と愛

前には、真実愛の問題もしょせんは仏の心を心とする大信心によらねば解決の出来ないことを述べました。仏の心を心とするということが忘れられた信心は、人間の得手勝手でありませぬ。

「世の中には食うにも困るような人もいるのに、仏祖のおかげで安穩に食わして頂きます。」

こんな喜びを純粹な信だと思っている人があります。ルンペンの側を自動車で身の幸を念仏に結びつけつつ感謝して通られたのではたまりませぬ。信の不純は、すぐ愛の世界の不徹底、不純を具います。

愛憎

私どもの所へ泣いて来られる人の種類は沢山であります。一番多いのは家庭苦であります。家庭苦はたいがい、愛憎のもつれであります。非常時日本も苦痛には違ひありませんが、家庭非常時ほど深刻に人を苦しめるものはありません。

一寸帰りが遅かつたとて、妻にヒスをおこされて三日間も床についてしまわれる男。小姑鬼千匹ぶりを発揮されて、嫂が十二人も変わった家庭。嫁と姑のいがみ合い、等々の例をあげればきりがありませんが、それ等は全て愛に対する認識及び、生活の低いことから来るのであります。如来の智慧光によつて大否定の鉄槌を喰らうべきであります。一体正しからざる者ほど正しさを主張するものであります。親鸞聖人は「小慈小悲もなき身」と告白懺悔していられます。そこにこそ如来の大慈悲が生きているのであります。

自照の光

真実愛は必ず世の中を明るくします。金殿玉楼の中も、憎悪が充ちておれば、暗黒であり、賤の伏屋も慈愛が充つれば、楽土であります。

「明るく嬉しく生きる」ことは、我等の唯一の目標でなくてはなりません。

人間が集まっている以上、決して問題を絶対におこさないというわけにはゆきませぬが、しかし、本能我——即ち、貪欲や、瞋恚や、愚痴のみものを言わせて、内省もなければ、懺悔もない、煩惱生活のままに動く人が集まったのでは、問題の絶える暇がありません。

誰だつて、全身全霊煩惱ではありませんが、その八万四千の煩惱を、仏の光に照破されて、仏の心を心とする生活に転じて、そこに懺悔と感謝の大信心を見出すならば、その人を照らす光明が家庭の光、社会の光ともなります。かかる人の集まる所こそ、嬉しい明るい世界となります。

教えへの態度

仏の心を心とする生活、その生活者は必ず、自分の欠点や過失を注意されると、深い感謝を持ちます。しかし、仏の心の出ていない人は、当然な注意を受けても、必ず

暗い顔をし、怒り、反抗し、あべこべに悪口をはき、あるいはしょげかえり、悲観し、自卑します。その反対に、人が少しでも褒めたり、認めたり、お調子にのせると、喜び、自負し、自慢して自らの姿を失います。こうした人がいる家は、その人を中心に家を暗くします。かかる人は自分のしていることは何でも少しも悪くないと思っています。

仏の心を心とする人は必ず善知識を持っています。体は二つでも、心は一つの善知識を持つています。したがって、自分の善を褒められても、自分を知っていますから、善を忘れ、かえって恥じ、又悪を常に内観して、その教えの鏡に照らされていますから、悪にとどまりません。したがって善にも悪にも縛られないで、仏の心を心として生きてゆきます。かかる人は人をもつれてその家を明るくします。こうした教えに生き、仏の心を心として生きる人の側は、春のように暖かであり、黎明のような朗らかさと明るさを持ちます。

報謝の生活

自分全体を捧げきり、なげ出したほど、大きな深い愛の態度はありません。しかし、その人は決して小慈悲すら持ち合わせのないことを信知しています。自分を捧げきらず、投げ出さず、我慢の城に立てこもっている者ほど、自分は大愛の人で人は皆真実がないの、腐っているの、愛がないのと、わめき回ります。しょせん、自分の世界を暗くするものは、我慢、我欲、瞋恚、愚痴・・・自分の心以外にはないのに、それが深ければ深いだけ、明るく嬉しくない原因を自分以外に求めます。真実愛の枯れは、
 11
 てた人の心です。

仏の心を心とするとは、この我を内観して、我慢を見出し、仏の心に立つて生きる、報謝、大忍の生活のことです。

我等の目標 その四

「私どもは、仏の心を心として、全ての人をこの道にお誘いして歓びをお分かち致しましょう。」

大乘と小乗

仏教では、迷いの世界を、地獄、餓鬼、畜生などと説く反対に、悟りの世界を、声聞、縁覚、菩薩、仏と説きます。その中で、菩薩や仏の世界を大乘と言ひ、声聞、縁覚の世界を小乗と言ひます。

小乗とは小さい乗り物ということ、自分一人しか乗れない乗り物です。それに反して大乘とは、一切万人の乗れる大きな乗り物ということです。春が来ると、草も木も、一切のものが、春の力に乗っています。春は大きな乗り物です。そこで大乘仏教では、一切万人、誰でも乗らなければ人間とは言えない大きな道を説くのであります。譬えて言えば、仏教に「無我」ということを説きます。私どもの生き方が、自分一人

の勝手や、幸福を通すための打算的な心、それから出る行い、生活だけでありますと人生は美しくなるものではありません。

この我を通そうとするあさましい生活が、やがて救われて、無我の生活、自分を全て捧げきった生活、人類社会のためなら、自分の幸を求め心を超えて、人類共同の仕事の中に自分の全てを打ち込んで働く、こうした無我の生活者が集まらないと、人生は行きづまってしまいます。ですから、無我的生活ということは、人類の全てが承認しなければなりません。それでは無我に生きるにはどうするか、そこに大変な問題が横たわっています、今はあづかっっておきます。

人間の死

さて、小乗の組にはいる人ですが、声聞というのは、自分一人だけ助かろうとしている人です。この考えにいますと、何時までたつても安心がありませんから、お話しならお話を一生聞いているしか道がない。声聞とは「声を聞く」とありますが、言葉は受け取れても、その真意がわからないのです。話が話でおわつて、一生お寺参りをしたが無にもない。結局は言葉だけ覚えていて。よく世間で、自分一人の幸福ばかり考えている人のことを声聞根性と言いますが、我が打ちくだかれない以上、救われません。次に、縁覚というものは、あるいは独覚とも言いますが、これは声聞とは反対で自分ではわかつたつもりです。固い堅いものを持っています。この独覚になると、自分より賢いものはないと思っっています。自分のすることは何でも正しい。もう自分は悟を開いた。外から見ればふき出したいほどおかしくても、自分では得意です。もうこういうなると木が太るのを止めたのと同じです。即ち枯れた時です。新しいことを知れば、知つただけが高慢の材料になります。

声聞も縁覚も嫌な世界であります。

ですが、この二つの世界において根本的に違う所は何処かと云いますと、真理に対する態度において、声聞は聞くことばかり知つて伝えることを知りません。自分が助かることに急で他を省みない。

縁覚は、それに反して、伝えることを知つて聞くことを知りません。人に聞かす一方です。世には、人を捕らえらるとすぐ説教ばかりして、自分は決して聞かない人があります。都合のいいように人には語つて、自分は遂に、天地間、誰の前にも頭を下げない。困つた存在です。

そこで、龍樹菩薩は「もし、菩薩が二乗に墮すれば菩薩の死である」と言っています。その心は、人間がもし声聞や縁覚に墮ちたならば死んだと同じである、真実の人間にはなれない、ということでもあります。

菩薩の道

それに反して、真実に生きた人間——即ち菩薩は、自分が、自分全体を捧げ、全人類に生きていますから、その生き方の中に法悦をもっています。どんな苦悩や、禍や、不幸の中にも声なき声を聞いています。したがつてその生き方が終始一貫していませんから強いのです。

真理を求めます。そのために自分の生き甲斐があることを知っています。しかし、真理は妙なもので一知れば十の深さ、十知れば百の彼岸が見えて、だんだんと、自分の愚かさを知ります。ですから、求めること聞くことを廃業しません。卒業がないのです。

しかしそれかと言つて、声聞のように、ふらふらした腰で、不安心な世界にもいません。金剛の腹力を持つていますし、自分の中に満ち足りていることを自覚していますから、外物を追うて、自分の不満足を補おうとはしません。感謝のために神仏は押んでも、得手勝手な祈祷など致しません。

永遠に聞くのみならず、伝えずはおれない強い強い願いを持つています。伝えずにはいられない所が声聞と違いますし、聞かずにいられない所が縁覚と違います。

去年の暮れに、兵庫県住吉支部の、大島みち、大島はやの二人が台湾の基隆にゆきました。みち法姉がお母さんで、はや子さんはお嫁さんです。みち法姉は、住吉支部の産みの親です。——こんなことを書くのと叱られますが——まあ立派な人です。あの年でいて、どんなむずかしい話でもわかる。合掌して聞いてゆかれる相、私のみならず、誰でもがあのお母さんには参ります。御自身では「何という私の強い人間でございましょう」と言われますが、私どもが見れば微塵も私の相が見えません。仏様は私の強い恐ろしい心を見出した人を、無我にするのかも知れません。献身的な、人を裁かない、春のような温さ、観音様の御化身ではないかと思われるほどです。長年聞いていわゆる天晴れお同行になると高慢な相になるものですが、それがちつとも見えません。永遠に求道の相です。それなら求めてだけいるかと言えば、阪神間住吉地方の灯明台でした。住吉支部を造るのにも、一人東奔西走です。誰をでも動かさずにはおかない熱が見えます。今度、御令息が台湾と朝鮮羅津間の航路に転任になつて、台湾にゆかれましたが、十二月の大会のお別れの時、「先生やりますよ。台湾でも、夏の聖講には必ず帰つて来ます。先生にも必ず台湾へ来て頂くようにします。」あの声が耳の底に残つています。大島さんが台湾へ一歩足を入れたことは、光明団が足を一歩入れたことです。全身これ仏、全霊これ如来、純正光明団団員。

これのない人

「私どもは、仏の心を心として、全ての人を、この道にお誘いして歓びをお分ち致しますよう。」

求めずにはいられない何等の願いもない人には、人生の意味は知られない。

求めずにはいられない何等の願いもない人には、人類向上発展、人生浄化、文化創造の尊い重い使命は渡されない。

この使命が自覚されない限り、本質的な生き甲斐と喜びはこの人にはない。

したがつて——

この人には、伝えずにはいられない願いはない。誘わずにはいられない道はない。分たずにはいられない悦びはない。

たつた一つのもの、たつた一つのもの。

そのもの汝にありや。
敢えて問う、汝は人生の如何なる役割を果たしつつありや。

我等の目標 その五

「私どもは、仏の心を心として、しっかりとした団結の上に立ち、社会に根強く働きかけて、仏の心を中心にした社会を造り上げましょう。」

当然の使命

「私どもは、仏の心を心として、全ての人をこの道にお誘いして、歡びをお分かち致しましょう。」

それが第四の目標でありました。この「道」にお誘いして、この「歡び」を分かつ、それは救われて喜び生きる者の当然の使命であります。

世にはあまりにも多くの人が、道を失い、暗に迷い、苦悩に陥り、人生に泣いております。しかもそれが、正しい道聞き、み法を求めて、金剛不壊の大信念に生きることによつてのみ、永遠に解決されるのであることを知らずに。

私どもは、暗い人生の片隅で、すでに一人何人、心中まで企てた人が、正法を聞き、如来に生きて更生転回、今では幸福なる今日を生きぬいているのを知っています。

かつては、家庭の、社会の暗の中心だった人が、今では人生浄化の源泉にふれて、世に尊ばれている幾多の人を知っています。

あるいは又、悪魔的英雄主義的な存在として多くの人を苦しめ悩ましていた人が、大懺悔の後、今では人に尊敬せられるようになった事実も沢山あります。

そうした尊い事実の全てが、皆、人から人に「この道にお誘いして、歡びを別ちたい」との念願の動きによつて出現してきたのであります。

よく求める人、よく聞く人、はつきりと生活する人は、必ず、よくはたらきかける人、よく働かす人であります。涙の谷に沈める人が道に生き、歡びに生きるに至ったほど有難いことはありません。

団結

「仏の心を心として生きる」人が集まった時、肉親の親族にも増した同心一体の結ばれが出来て来ます。そこに真実の団結が生まれます。

憶うに、欲望による集まりはついに強力であることは出来ません。欲望は、人によつて違っているし、永続性がないからであります。欲望は、個人主義的なものであり、利己的なものであります。どうして真実の団結が成就しましょうぞ。

仏の心を心とする者の集まりは、信によつて集まるのであります。信は、善悪を出た第三天地であり、賢愚を超えた第三世界であり、男女を問わぬ第三天地であり、貴賤同族を越えた第三世界であります。誰の中をも同一の如来の信が貫流します。私どもは唯、この一切を超えたる如来の信によつてのみ、同心一体となることが出来るのであります。故に我等の集いには、この第三世界をもつて来るべきであります。

分裂

上は大政党から下は一家庭まで、分裂したり、離れたりするものは、必ず、感情問題か、私利私欲が原因であります。私利私欲は如来の信ではなく、悪感情も如来の信にそむくものであります。小さい感情が大きな隔たりを生み、大きな欲が相互の密接な情義を裏切ります。

悪感情や、私利私欲は、それがどれほど形を変えようと、人を分裂離反せしむるものであるのに反して、如来の信には、これを徹底すればするほど、一体へ、団結へ、とつれてゆかずにはおかない必然性があります。

個人生活の尊重

我が光明団全陣営においても、求道熱の盛んである所は、団結もまた強固であり、団結の出来た処は社会に働きかける力も強力であります。

そこで私どもは第五の目標として「私どもは、仏の心を心として、しつかりとした団結の上に立ち、社会に根強く働きかけて・・・」と掲げずにはられません。

しかしよほど注意しなくてはならぬことは「社会に根強く働きかける」ということについてであります。それは個人の生活、個人の歩みを決して軽視するのではないということであります。否、個人の生活こそ、最も尊ばれなくてはなりません。

宗教の世界には他の世界に持たない特徴があります。即ち、何れの世界よりも、我々というものの上に深い世界を見出し、深い内観を要求し、求道と生活を求めます。したがって、伝道や事業や説教や、そうしたことは末の末のことであつて、それよりも、その人が如何に合掌して如来の教法を聞き生活したかが最第一の必要事であり、肝要第一義であります。これを忘れては何ものもありません。

社会に働きかけることのために、自らの求道も生活も眼中になく、天晴れ、物識り、智者、等々になりすまして、如何に天下にむかつて怒号したところで、それは悲惨滑稽なる噴飯事であります。

個人的に見れば、我執、我慢、我欲、放蕩無頼の者が集まつて「仏教は無我イズムである。」と言つた所で、個人、個人が無我の生活者でない時には何にもなりません。そこで我等は一生を通じて聞法求道、我自身の尊重、精進、創造不退の歩みを続けねばなりません。

自然の力

しかしてそこに自然に生まれて来る団結、その団結の中から生まれて来る光と力とが、任運無作に、自然に社会に根強く働きかけて出るのでなくてはなりません。

一時のはずみや、香具師的、投機的気分や、事業熱や、英雄主義や、売名や、そうした一切の毒素を、如来の智慧光によつて克服して「仏の心を心とした」働きかけでなくてはなりません。

私どもの歩みは、一時に、早急に、如何に世の中からやんやともてはやされたかというようなことが問題でなくて、どれだけ深く、真実に歩んだかということが問題なのであります。

私どもの「仏の心を心として」の願いは初であると共に終であります。仏の心を心とする者の集まって生きる家庭、家庭の中でまず仏の心を心として生きさせて頂きましょう。更に私どものそれぞれの社会的役割の中で、仏の心を心として生きさせて頂きましょう。やがてそれが拡大されて、仏の心を心とした社会が生まれ、国家が成就することあります。

重ねて言う

私は、「我等の目標」五ヶ条について、語って来ました。それは私が何時も何時も考えていることであり、生活していることであり、生活しようとすることであります。しかして、

- (一) 求道不退の願いも、
 - (二) 至心精進の信の生活も、
 - (三) 真実愛の問題も、
 - (四) 救われた者の使命も、
 - (五) 社会生活の基調も、
- 全て「仏の心を心として」の成り立つことを述べました。

私は重ねて「おい兄弟、お互いに仏の心を心として生きてゆこう。」と言わずにはいられません。

同胞と共に

天言地声

「汝は今

大きく大きく動こうとする

だが一寸まで しかして考えよ

何のために動くのか

どんな心が根底で動くのか

如何なる手段を取ろうとするのか

その十分間の沈黙が

やがての日の千里のまちがいを正す。」

今日、私が同胞に送る精一ぱいの心であります。

気をつけても気をつけても、後になつて見れば失敗だらけであり、後悔のみ多いこととあります。それに気もつけず、考えもしないでためで行ったのでは、どんな恐ろしいことを仕出かすかわかりません。同胞に捧げると共に、私が私に言つて聞かせる言葉であります。

手紙一本でも

お母さん、貴女は今、娘御の処へ手紙を書こうとしていられますか。一体、何のためにお書きになりましたか。どんな心でお書きになりましたか。それを書いて娘御に何をさせようというのですか。一寸その御手紙を見せて頂きます。なるほど、要点はこうですね。

一、多忙な、やかましい家庭で、お前が疲れるのも無理はない。

二、先方の姑や、夫のやり方は随分悪い。

三、ついでに父が病だと電報を打って呼んでやるからその気でおれ。

と書いてありますね。かわいい娘御のことです。ごもつともです。しかし考えて下さい。貴女は一度は、先方の夫や、姑等の言い分も聞きましたか、娘御の生活も調査しましたか。昔の武士の家庭では、嫁ぐ時は九寸五分を渡して、親郷に甘えて、自分の生き方の不徹底さを許されようとする迷路を封じました。これ冷たきに似て、真の慈悲であります。

貴女のような態度では、娘御の将来も気使われます。調査してごらん、貴女の娘御は、先方で親里を笠に着て、一寸大きな音がしても「郷にかえる」を連発しているに違いありません。もし偽の電報を打って、一時を可愛がるというようなことをくり返されたのでは、娘御は一生軟鉄のまままで苦しみに出会う度に泣く不幸な人になります。考えてその御手紙を書きかえて下さい。今の貴女の心は、念仏の心ではなくて、先方を恨む心と、娘御への愛着の心であります。

十分間

一家五人、食うに困って五人心中をしようとする男が、今一度静かに考えてくれたら、死ななくてもよかつたかも知れない。

わずかな言いがかりで、腹をたて相手を刺殺した男が、牢獄の中で流す涙、その中に流れるものが凶行を演ずる前にちらつと輝いていたら、自他共に助かつたであります。

瞋恚、怨み、嫉妬、貪欲、等々、大きく動く前に、まず静かに坐れ、眼を閉じよ。そして静かに念仏申せ。決して、瞋恚の心に乗ってはなりません。時には、唯言葉一つが、取りかえしのつかぬ大問題をおこします。ましてや、平静の行動と違って、大きく動こうとする時には、如何に苦しくても、決して軽率に動いてはなりません。後になつて、とりかえしのつかぬことになってしまいます。わずかに十分間の沈黙が一生を支配します。

大聖の信境

人間が生きているのか、

南無阿弥陀仏が生きておるのか。

全身の細胞の一つ一つすらが、如来によって生きている大聖の生きる領域を憶う。

『安心決定抄』に曰く、

「念仏三昧において、信心決定せん人は、身も南無阿弥陀仏、心も南無阿弥陀仏なりと思ふべきなり。人の身をば地水火風の四大寄り合いて成ず。小乗には極微の所成といえり。身を極微に摧きて見るとも報仏の功德の染まぬ所はあるべからず。されば機法一体の身も南無阿弥陀仏なり。心は煩惱、随煩惱等具足せり、刹那々に生滅す。心を刹那に千割りて見るとも、弥陀の願行の遍ぜぬ所なければ、

機法一体にして心も南無阿弥陀仏なり。(中略) 吾等が色、心二法(肉体と精神)、三業(身、口、意のはたらき)、四威儀(行、住、坐、臥)すべて報仏の功德の至らぬ所なれば、南無の機(信心)と阿弥陀仏の片時も離るゝ事なければ、念々みな南無阿弥陀仏なり。されば出づる息、入る息も仏の功德を離るゝ時分なければ、みな南無阿弥陀仏の体なり。縛日羅冒地といひし人は、常水觀をなしゝかば、心に引かれて身も一つの池となりき。その法にそみぬれば、色心二法それになりかえることなり。」

幾度読んでも飽かぬ大文字であります。バザラボヂという人は、何時も何時も水のことばかり観じていたので、身も遂に池となつてしまつたとは、面白い譬えであります。

如何なる大聖といえども、私どもと同じく煩惱を持つていたことに違いありません。火は熱く、氷は冷たく、喜怒哀樂の情も、人間的な欲望も全て持ちつゝも、しかも大聖たる所以は、その全体に如来が生きてましましたのであります。

炭に火のおこりつきたるが如く、その全身全霊が聖なる如来の血に生かされ、苦惱 18 の中にいつつも苦悩を忍び、煩惱の中にいつつも煩惱を超えて、不滅の光と悦びに感謝し、合掌し、懺悔して、本願に生きてゆく処に、大聖の生きた領域に通ずる道があります。

如来に底がない限り、我等の歩みにもまた底がありません。

光悦のみ座

正しい宗教を失つた現代人たちは、高い高い文明の中で、高等な教育を受け、多くの富と時間とを持ちつつ、いよいよ赤裸々に、露骨に、本能の享樂に醜い相をおどらしています。宗教を無視した教育の罪であります。

ただれた世相をじつと凝視めつつ、私は黙つて聖者の信境に合掌して
限りなく天真の法を聞き、教を受け、典を生きて、徳を得ん。

智慧光によつて眼を内に開かれ

煩惱の相を諦観して、地獄一定必墮無間、その無功德底に合掌して、念仏する。

我生きるに非ず、如来我にあつて生き給う。

如来の大悲は、我が寿命

如来の願力は、我が願力

如来の信力は、我が信力

如来の智慧は、我が光明

如来の功德は、我が功德

この如来金剛の聖座に安住して、寄せてはかえす苦悩を忍受せん。

念願

噫。「仏の心を心として」生きる吾等の幸、尊重すべき哉。感謝すべき哉。同胞よ。共に同心に「仏の心を心として」生きぬいて行こう。永遠に不退転に、この大道を行歩してたじろがず、世の底に光る人こそ、地位を超え、男女を超え、善悪を超え、賢愚を超えて、永遠に我が尊き同胞である。

されば同胞よ。我等は生死界にありつつも、浄土の如来の眷属である。み親の尊さは、唯我等の合掌生活の上に顕れ給うが故に、全我を捧げて、国土莊嚴の歓喜に生きましよう。永遠に仏の心を心として。